事後評価報告書

１．基本情報

（1）実行団体名	特定非営利活動法人子どもシェルターモモ
（2）実行団体事業名	児童養護施設等を退所後に困難を抱えた若者支援の充実・強化事業
（3）資金分配団体名	中国５県休眠預金等活用コンソーシアム
（4）資金分配団体事業名	中国５県休眠預金等活用コンソーシアム休眠預金活用事業
（5）事業の種類	草の根活動支援事業・地域ブロック
（6）実施期間	2020 年 8 月～ 2023 年 3 月
（7）事業対象地域	岡山県

２．事業概要

①事業によって解決を目指す社会課題と想定される直接対象グループ

児童養護施設等の社会的養護経験者／100 名以上

（間接的対象グループ）岡山県内社会的養護の施設／各施設の担当職員・里親　30 名程度

②事業の概要（中長期アウトカム・短期アウトカム・活動）

(1)中長期アウトカム
岡山において、社会的養護を退所した子ども・若者たちが、社会で孤立せず、一人ひとりが生きがいを持ち、地域生活を送ることができるようになる。

(2)短期アウトカム	指標	初期値/初期状態	目標値／目標状態	目標達成時期
拠点が整備される	拠点の確保状況	受け入れ可能な部屋数 居場所：3部屋(1人1部屋) 作業・訓練スペース：なし	受け入れ可能な部屋数 居場所：5部屋 作業・訓練スペース：1部屋以上 感染症拡大に防止に配慮した拠点の整備(空間の間仕切り等)	2022年度中
	・支援人材の育成状況 ・支援者どうしの連携機会提供数	・情報共有をする機会：なし ・非常勤スタッフの関わり：平日午後のみ ・継続するための人材：約2.5人	・情報共有を行う機会：年3回以上	事業終了時点
社会的養護を経験した子ども・若者が適切に相談できる場所ができることで、相談対応体制が整う	社会的養護を経験した子ども・若者が適切に相談できる場所の認知度	アフターケア相談所enの認知度が低い (事前評価にて認知度合いを測定)	現時点で施設で生活している子ども・若者への認知度が上がり、退所後の選択肢に加わる 認知度80%以上	事業終了時点
就労支援の内容が充実することで、子どもたちの職業選択の幅が広がる	・拠点内作業スペースの設置状況 ・受け入れ先企業の確保数	・機会(受け入れ先となる企業)：0件	・機会(受け入れ先となる企業)： 3業種以上(事務、技術、接客等複数) ・パソコンを用いた実技演習機会の提供：1回以上	事業終了時点
	高卒認定試験受験者数	・受験者数：2名程度	・受験者数：5名程度 (希望者が全員挑戦できる状態)	試験ごと

(4)活動	時期
【アウトプット1「拠点整備」に対する活動】	
(1)アフターケアの新たな拠点ができ、ステップハウス機能が整う：拠点の整備（物件の購入、拠点の在り方検討、改修工事）	2020年度～2022年度中
(2)必要な部屋数を確保する：拠点整備前後において、作業療法士から支援をより効果的に実施するためのアドバイスを受ける(改修工事、中間評価)	2021年度～2022年度中
【アウトプット2「人材育成講座の実施」に対する活動】	
(1)非常勤スタッフ向けの講座を定期開催する(平日日中開催)：開催日時の検討及び試行開催	2020年度～2022年度中
(2)実際の活動時間に動ける人材の確保(平日日中)：修了生へのフォロー、開催時期及び内容の見直し	2020年度～2022年度中
【アウトプット3「各養護施設に配置される自立支援コーディネーターとの合同研修実施」に対する活動】	
各養護施設との間で情報交換を定期的に開催：自立支援コーディネーターに期待される役割を把握したのち、情報共有の場を設定	2020年度～2022年度中
【アウトプット4「企業など、関連機関との支援ネットワークの構築」に対する活動】	
企業との定期的な意見交換を実施し、具体的な就労支援の機会等について検討を行う	2020年度～2022年度中

③出口戦略

広報戦略
上記支援者どうしでの情報交換に加え、子どもや若者へ向けた直接の情報発信も行う。 ・若者が出入りする施設や店舗 にパンフレットを設置する ・SNS での情報周知及び収集
連携・対話戦略
各養護施設との間で定期的に開催する情報交換と、岡山市担当課への事前調査の中で実施する。 企業や関係機関とのネットワーク構築を通じて情報交換を行う。

３．事後評価実施概要

（１）実施概要

①どんな変化をこの事業の重要なポイントとして設定し評価を実施したのか

直接対象グループを取り巻く支援の環境がどのように整い、その結果どのような変化をもたらしたのか、実際の出来事や当事者の言葉をもとに、そこへ支援者側の視点も取り入れながら検証を行った。

②どんな調査で測定したのか

１．短期アウトカム「拠点が整備される」の評価（支援人材の育成）

１）調査方法

・以前より活動しているボランティアへのヒアリング（2022 年度、2023 年度）

・アウトプット②で実施した「ボランティア養成講座」を受講後、新規にボランティアへ登録した方への個別ヒアリング。

＜ヒアリング項目＞

・継続ボランティア

ボランティア養成講座受講のきっかけ、活動継続の理由や同期、子どもたちと関わる中での工夫、自身の気持ちの変化、活動する上での悩みと期待するフォロー、ボランティア養成講座への提案　等

・新規ボランティア

実際に活動へ入っての感想（良かったこと、困ったこと・要望、その他課題）

２）調査実施時期

・継続ボランティアヒアリング：2021 年 9 月

---結果を踏まえ、2022 年 1 月～ボランティア養成講座ならびに新規ボランティア登録受付、活動開始---

・新規ボランティアヒアリング：2023 年 12 月

・継続ボランティア交流会におけるヒアリング：2023 年 2 月 15 日

３）調査対象者

・継続ボランティア

当法人において、2021 年以前にボランティア登録をした 6 名

・新規ボランティア

ボランティア養成講座修了後、ボランティア登録を行った 18 名のうち、2022 年 10 月～11 月中に実際の活動を行った 12 名。

４）分析方法

継続ボランティアへのヒアリングをもとに、ボランティア養成講座の内容・修了後実際に活動へ入るまでの受け入れ手順を整理した。その内容が新規ボランティアにとって有効であったか、発言をもとに検証。

３年間の事業を経て、その実施内容を伝えたうえで継続ボランティアのヒアリングにより事業効果を検証。その結果を踏まえ、以下の変更について事業内において試行した。

「ボランティアコーディネートの開始」

事業開始時点の継続ボランティアへのヒアリングにおいて、「座学で得た知識は役立ったが、実際の活動に入った際は『では子どもたちにどう接するとよいのか』がわからず不安であった」との声が聞かれたため、ボランティア登録後のフォローアップを行うこととした。

講座修了後のボランティア登録にあたっては 1 名ずつ希望のヒアリングや活動先となる各ホームなどとのマッチングを行い、活動開始 1 か月後には感想等を聞くための個別ヒアリングを実施した。その結果、「子どもにどう関わって良いか分らなかったが、職員からアドバイスがもらえて良かった。」との声が聞

かれた。しかし、一方では、活動先とボランティアとのマッチングが上手くいかず、ボランティアの参加頻度が少なくなるという場面も見られた。これらを解決するためには、ボランティアには、子どもと関わるうえで必要な知識だけではなく、「ボランティア活動」について学び・考える機会を設けること、職員側もボランティア受入れの意義や方法について考える機会を設けるなどの方策が必要である。
また、継続ボランティア交流会においては、ボランティアにも研修の機会を与えてほしいとの意見があった。今後も継続して、ボランティアの意見を聞くためのヒアリングや交流会の実施、ボランティアと職員とが共に学びあう機会の創出が必要である。

２．短期アウトカム「社会的養護を経験した子ども・若者が適切に相談できる場所ができることで、相談対応体制が整う」の評価

１）調査方法

資金分配団体による、主要利害関係者向けヒアリング

＜ヒアリング項目＞
・別紙のとおり

２）調査実施時期

・2022 年 12 月 7 日～2023 年 1 月 23 日

３）調査対象者

・対　象：自治体担当者 2 機関、児童相談所担当者 2 機関、企業関連団体 1 機関
・方　法：実行団体から本事業の 3 年間の内容並びに実績について情報提供のち、その内容を踏まえ資金分配団体から対象者へヒアリング（活動に対する評価の項目について実行団体は離席している）。

４）分析方法

ヒアリング結果をもとに、実行団体において検証。

(ア)実行団体との関係

委託事業の受託元、子どもの支援に関する個別のケース共有と連携、就労支援プログラムの協働開発など。

(イ)活動に対する評価

全５機関とも「1.高く評価している」との結果であった。
上記評価の理由として、「子どもの支援において必要な機関との連携が即時取れていること」が共通として挙げられ、実行団体が持つ子どもへの支援の実績や専門性のみでなく、他機関と積極的に協力を行っている点が評価された。
また本ヒアリングを通じて「こんなこともやっているんだと初めて知った」との声もあり、今後よりいっそう連携したいとの反応も得られた。

(ウ)活動の成果

岡山において「民間団体の専門性をつなぐ役割」を担っているとの評価が多く聞かれた。特に 2022 年度中において主催した２回の「アフターケア勉強会」参加者からは、「国の機関、他地域の事例等の話を官・民交えて同じ環境で学び、それぞれが地域へ持ち帰り実践していくための検討を共に行うという設えが新鮮であり、実際の支援に生かす上で貴重な機会であった」との評価を受けている。

(エ)当該分野・地域における役割

各制度における支援対象年齢を過ぎたり、環境の変化などにより支援が途切れたりしたあとの子どもたちを最終の受け皿として受け入れ、地域へつないでいく機関としての認識がされている。
また新たに拠点を設けたことで、「なにかあったらここへ行ってみて」と紹介しやすくなり、安心感が増したとの声も聞かれた。他所で一度支援を受けた子への再支援なども担っている点について評価がなされた。例えば「一度一人暮らしをしてみて難しければ戻ってきてもいい」など、その子のペースが見つかるまで寄

り添っている点について、重要であるとの声が聞かれた。

(オ)他団体との連携・協力

強みはネットワーク力であるとの声が多く寄せられた。中でも行政との連携において、生活保護の手続き、身分証明などの手続きも丁寧に行う印象がある。

弁護士がついていることも安心感のひとつ。児相職員では対応できない、ちょっと躊躇してしまうような法的な面も支援してくれる。寄り添う内容が広い。

(カ)地域における認知度・評価

企業団体からは、参画する会員企業約 400 社へ取り組みの紹介を行っているため認知度は高いとの回答があった。

行政担当者からは、「支援者どうしが地域資源を知っていること、必要なときにつながれる・使えるようになっておくこと」が必要であり、モモはそのつながりをすでに築いていることに驚き、評価するとの声が聞かれた。また養護施設を出た子どものへの支援という意味でも、モモと各施設とがつながっていることが重要であるとし、その点でいえば、「各アフターケア事業所がやっていることが施設側にまだ十分には知られていない」との指摘があった。

(キ)波及効果

子どもたちへの支援において、「子どもに複数の人が関わっている、いろんな関係機関とのつながりを持てている」ということが大切なので、その関係づくりを担っていただけておりありがたいと感じる。

支援にあたる立場としても、他機関へつないでもらえてありがたいと思っている。特にネットワークづくりとして実施された研修では、参加者相互に話し合う時間が設けられており、その中で「どこの団体がどんな支援をやっていて・なにができて、自分たちに対してなにを期待されているのか」を直接聞くことができた。

(ク)その他

寄せられた意見について、以下に紹介する。

・活動報告を聞いて、子どもたちの笑顔が見えるようだった。制度事業として上がってくる報告の中だけでは見えないこと。就労支援の実績などにおいて、支援したが結果退職してしまったような取り組みもあったが、どのような結果となってもそこに必ず気づきがあり次につながっていることはすごいと素直に思う。

・各施設が作っている自立支援計画の中に、最初から「モモの支援へつなぐ」を入れていきたい。施設側も連携の仕方、支援に入ってもらい方がわからないことが障壁となっている。施設側がモモを理解し、子どもとの施設との関係性を引きついていくような仕組みが必要。

・行政内での評価として、「施設退所前の支援数」が増えていることが注目されている。これをしっかりやっていく、という実績が必要。うまくいく事例があれば他の施設の理解も得られるはず。

・子どもたちの今後、「次」を急ぐとどうしても対応が事務的になってしまう。子どもたちは何を必要としているのか、どの支援にヒットするのかはわからないが、幅広く構えていることで、子どもを大切にしていると伝わる。

・活動報告の中には知っている活動も知らない活動もあったが、よくされていると思う。活動の広がりを感じる。支援者のつながりによって子どもの多様なニーズに対応する、ということが実行できている。

・子どもの自立とは続かないもの。一度社会に出た後、引きこもりに戻ってしまうこともある。その子ども達へのつながりを持とうとしてくれる。実際にアフターケアの支援を受けた、高卒認定の支援をしてもらったなどの声を子どもたちからも聞くことがあり、頼もしいなと思っている。

・企業として、最初に出会った数年前は、子どもたちの様子も福祉的な支援のこともわからず「なにが一緒にできるのか」手探りで協働がはじまった。いまでは「これは一緒にできますか」「これはどうですか」など互いに提案しあい、わからないことは率直に尋ねあうなどのコミュニケーションが取れてきている。モ

モに来る子どもたちはまず、世の中にどのような仕事があるのかを知らない。それを知れば、働くことに対して興味を持てるようにもなる。主役は子ども。いろんな選択をできるよう、こちらからも提案を続けていく。気を使って言いづらいようなことも伝えてほしい。一緒に検討していきたい。

3．短期アウトカム「就労支援の内容が充実することで、子どもたちの職業選択の幅が広がる」の評価

1）調査方法

本事業における支援を受けた子どものケース（代表２例）に関する分析。

＜分析項目＞

・事業実施前、実施後の支援者とのつながりや接点の拡大について（エコマップによる可視化）

・子どもたちへの支援、それによる変化ならびに成果の検証（時系列での整理）

2）調査実施時期

・2022 年 10 月 3 日(月)～2023 年 2 月 16 日(木)

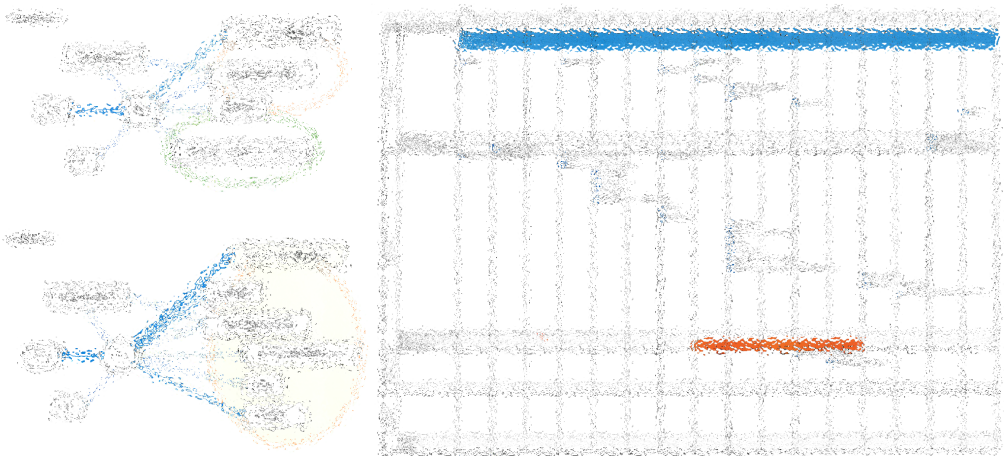
3）調査対象者

本事業の実施期間中に支援を行った２名（A さん、B さん）

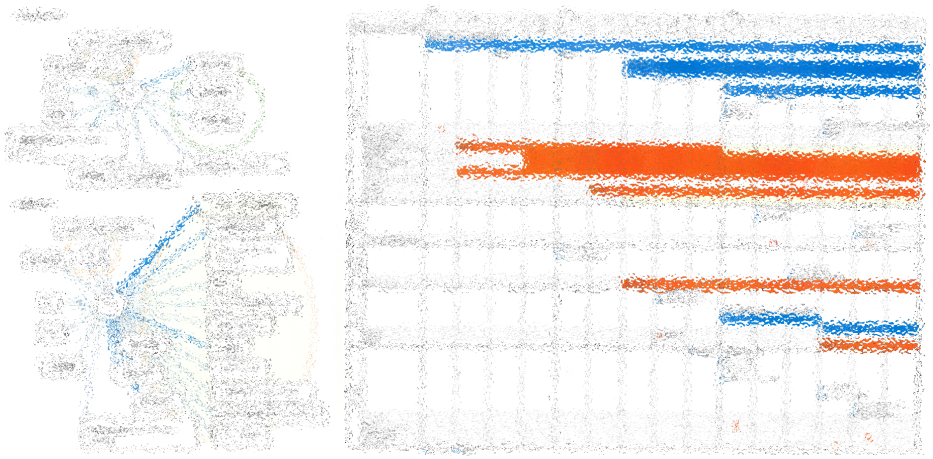
4）分析方法

事務局により、A さん、B さんに対して行った支援ならびに見られた変化をエコマップと年表に整理。社会福祉士により検証のコメントをいただいた。

＜A さん＞



＜B さん＞



③調査結果をどのように深掘りし価値判断をしたのか
二つの事例を深堀りし、検証することで、どちらのケースも今後の目標として「居場所としての en の利用は続いているため、他の支援機関や他者との継続した関係を築く体験を積み重ねることを、支援の第一目標とする。」という結果に行きついた。このことは、アフターケアの成果は数値等で測れるものではなく、継続をすることが重要であるという結果を実証したものであると考える。

（２）実施体制（内部/外部、評価担当役割、氏名、団体・役職）

区分	役割	氏名	団体・役職
内部	評価全体実施	西井葉子	特定非営利活動法人子どもシェルターモモ
内部	ボランティアへのヒアリング実施	易美里	特定非営利活動法人子どもシェルターモモ
外部	本事業における支援を受けた子どものケース（代表２例）に関する検証	梶原好恵	弁護士法人 岡山パブリック法律事務所 社会福祉士
外部	主要利害関係者向けヒアリング　聞き手	北内はるか	（資金分配団体）中国５県休眠預金等活用コンソーシアム　特定非営利活動法人岡山 NPO センター

※（２）実施体制に記載した氏名・団体・役職についても公表される情報となりますのでご留意ください。

４．事業の実績

4 - 1 インプット（主要なものを記載）※最新事業計画書のインプット欄から転記してください。

（１）　人材（主に活動していたメンバーの人数や役割など）

区分	役割	氏名	団体・役職
内部	全体統括・管理者	西﨑宏美	特定非営利活動法人子どもシェルターモモ　副理事長
内部	担当者（全体担当、進捗管理）	西井葉子	特定非営利活動法人子どもシェルターモモ
内部	担当者（全事業担当）	易美里	特定非営利活動法人子どもシェルターモモ
外部	支援者の人材育成講師（作業療法）	小林隆司	岡山医療専門職大学 健康科学部 作業療法学科 教授
外部	支援者のスキルアップ人材育成講師（支援者支援）	原田奈穂子	岡山大学　学術研究院ヘルスシステム統合科学学域　教授

（２）　資機材（主要なもの）

なし

（３）　経費実績　助成金の合計（円）

①契約当初の計画金額	3,378,490 円
②実際に投入した金額	2,680,000 円

※差額については後述（後述）

（４）　自己資金（円）

①契約当初の自己資金の計画金額

円（2020 年度 0 円／2021 年度　2,301,440 円／2022 年度　1,077,050 円）

②実際に投入した自己資金の金額と種類

2,680,000 円

・寄付金：2,680,000 円

③資金調達で工夫した点

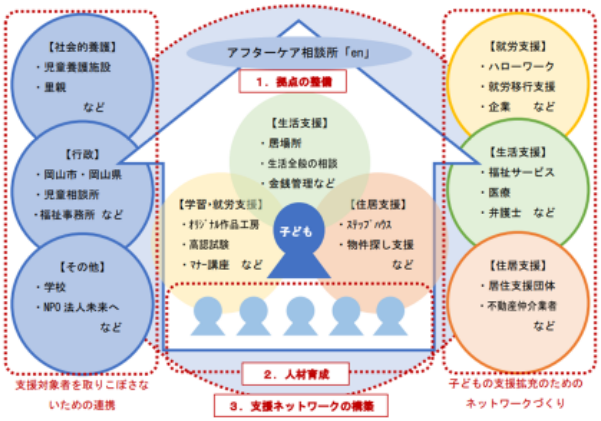
4 - 2 活動とアウトプットの実績

（１）　主な活動

①拠点の整備

②人材育成

③支援ネットワークの構築



（2）　アウトプットの実績

【アウトプットに関する記載項目】※下記①～⑤は最新事業計画書から転記してください。

アウトプット①

アフターケア事業を継続して行うことができる

指標	初期値/初期状態	目標値／目標状態	目標達成時期	実績値
拠点を活かし子どもの自立の準備が整う	支援ケースが少なく、記録・検証が実施できていない	支援を行った対象者のケース記録・検証と事例を蓄積し、未来の支援に役立てられる。事例：10件程度	2021 ～ 2022年度中	2020年：のべ2,108件 2021年：のべ2,714件 2022年：のべ3,716件

主な活動

・Salesforceを導入し記録を取り、内部の検討会議にて支援の検証を行っている。

・事業の実施を通じて人材育成と支援の体制づくりができたことで、支援の提供できる件数が増え、記録を取り蓄積する体制が構築できた。

・作業療法士によるコンサルテーション
法人内の施設の職員が、子どもたちへの関り方について対応ケースを持ち寄り、作業療法士の視点から講師よりアドバイスいただく。法人内の施設間のスタッフ連携を高める機会としても位置付けている。

・事後評価による事例の検証。

指標	初期値/初期状態	目標値／目標状態	目標達成時期	実績値
十分な自立支援が提供できる	子どもたちがＳＯＳを出せない。誰に相談をしていいかわからない。	子どもたちがＳＯＳを出せる先が複数あり、人への信頼感を持てるようになる。相談先：1人3件以上	2021 ～ 2022年度中	1人あたり9.5件 ★最終評価A・Bの事例における平均値

主な活動

・企業や行政、他のNPO等との具体的な連携に向けた関係性を構築しつつある。特徴的な事例として、継続的な情報交換の機会を設けているロータリークラブからの紹介により一名が就職、職場見学に実際に2か所訪問する事が出来た。職場見学については、つながりのあるロータリークラブ以外の2社からも受け入れ可能であるという企業の申し出が届いている。

・就労支援のノウハウを持つ倉敷市の団体と連携し、就労支援のノウハウを学んだ。学んだ内容を自団体での就労支援に持ち帰り活かすことで、支援体制の強化を見込んでいる。

■岡山北西・北ロータリークラブとの定期懇談
毎月1回懇談会を開催し、意見交換を行う。
①会員企業への就労（1か所）
②会員企業の職場見学（2か所）
③会員からの寄付

■多機能型事業所irodoriによる就労支援
2021年度に3名の支援を実施。
①本人との面談、履歴書の書き方指導 等

②本人との面談、履歴書の書き方指導、アルバイト就労先への訪問
③本人との面談、履歴書の書き方指導、マザーズハローワーク同行・利用方法等指導、岡山北西ロータリーからご紹介の企業での面談時の同席、1か月後の面談、退職時手続き同行

■ペアレントサポート・すてっぷ
①すてっぷの作家によるワークショップ（全3回）
②ハンドメイドマーケット@FLCBへのブース出展参加（出品3名、実演販売1名）

アウトプット②				
人材養成講座を実施する				
指標	**初期値/初期状態**	**目標値／目標状態**	**目標達成時期**	**実績値**
平日日中の活動に必要なスタッフ数が確保できる	金曜夜に定期開催しているが、受講生が実際の活動時間(平日日中)に参加できていない。	・非常勤スタッフの関わり：常時 ・継続するための人材：約3人以上	2022年度中	ボランティア登録者数 16件
主な活動				
・ボランティア養成講座（全8回） 本事業を通じ、2022年度に初めてオンラインで開催。受講生71名のうち16名がボランティア登録。				
指標	**初期値/初期状態**	**目標値／目標状態**	**目標達成時期**	**実績値**
非常勤スタッフやボランティアの関わり数が増え、支援が充実する	講座を修了した人が実際の支援活動へ結びつきづらい。	・非常勤スタッフの関わり：常時 ・継続するための人材：約3人以上 ・オンラインでの講座開催：実施	事業終了時点	ボランティア登録者数 16件
主な活動				
・ボランティアコーディネート 養成講座受講後、ボランティア登録のあった 16 名に対し、個別面談を実施。その後、ホームの事前見学をしてもらった。実際に活動に入る前に、活動の趣旨や支援の方向のすり合わせを丁寧に行うことで、ミスマッチを防ぐ取り組みを行った。しかし、活動現場とボランティアのマッチングは容易ではなく、ボランティアコーディネートについては課題が多く、引き続き検討が必要である。				

アウトプット③				
各養護施設に配置される自立支援コーディネーターとの合同研修を実施する				
指標	**初期値/初期状態**	**目標値／目標状態**	**目標達成時期**	**実績値**
関係機関が連携して行うアフターケア支援の仕組み形成	自立支援コーディネーターがいない(2020 年度より、岡山市内での配置開始予定) 開催数0回	切れ目なく支援を行うための関係性ができる。 情報交換開催数：年2回以上	毎年度、コーディネーター配置の都度	詳細を以下の＜主な活動＞に記載。

＜主な活動＞
■自立支援コーディネーター合同研修（岡山市主催）年３回 聖園子供の家、若松園、岡山市こども福祉課、岡山市こども総合相談所が参加し、各機関の情報共有を行う。 ■障害福祉制度合同研修（岡山市主催）年２回 岡山市内の複数の障害福祉サービス事業者と共に、岡山市こども福祉課や岡山市こども総合相談所、児童養護施設や児童自立支援施設等が参加しての合同研修を実施。 ■アフターケア勉強会の開催（第１回）「大分県の実践から学ぶアフターケア」 ・日時：7 月 18 日(月)　13：00～16：30 ・場所：岡山コンベンションセンター404 会議室 ・講師：矢野茂生さん（NPO 法人おおいた子ども支援ネット理事長） ・参加者：13 名（子どもシェルター理事、職員） ■アフターケア勉強会の開催（第２回）「神奈川県の実践から学ぶアフターケア」 ・日時：10 月 21 日(金)　13：00～16：30 ・場所：きらめきプラザ 706 会議室 ・講師：福本啓介さん（あすなろサポートステーション 所長） ・参加者：34 名（担当行政、児相、児童福祉施設など） ■アフターケア勉強会（第３回）「児童福祉法の改正と社会的養護自立支援事業について」 ・日時：12 月 3 日(土)　13：00～16：30 ・場所：きらめきプラザ 706 会議室 ・講師：胡内敦司さん（厚生労働省子ども家庭局総務課課長補佐） ・参加者：33 名（担当行政、児相、児童福祉施設など）

４-３外部との連携の実績

事業全体を通じて外部機関との協働において実施したものであり、その体制については４．事業の実績４-１インプット（１）人材（主に活動していたメンバーの人数や役割など）　に同じ。

５．アウトカムの分析

5－1．アウトカムの達成度

（1）短期アウトカムの計画と実績

【短期アウトカムに関する記載項目】※下記①～⑤は最新事業計画書から転記してください。

短期アウトカム①				
拠点が整備される				
指標	**初期値/初期状態**	**目標値／目標状態**	**目標達成時期**	**アウトカム発現状況（実績）**
拠点の確保状況	受け入れ可能な部屋数 居場所：3 部屋(1 人 1 部屋) 作業･訓練スペース：なし	受け入れ可能な部屋数 居場所：5 部屋 作業・訓練スペース：1 部屋以上 感染症拡大に防止に配慮した拠点の整備(空間の間仕切り等)	2022 年度中	居場所：3 部屋 作業・訓練スペース：1 部屋 生活物資の支援スペース（シェアルーム）：1 部屋 感染拡大、個々のプライバシーに配慮した間仕切りも設置済み。
＜主な活動＞				
・新たな拠点の開設 子どもシェルターや自立援助ホーム、児童養護施設などを退所した子ども・若者が気軽に立ち寄れる常設の居場所を開設。職員やボランティアが、来訪者のそれぞれのニーズに寄り添った支援を行う。 ・手作り弁当の提供 フードバンク岡山やコストコなどからご寄付いただいた食材等を利用して、ボランティアスタッフの方々に手作りいただいたお弁当を、毎週木曜日、来訪者に無償で提供。 ・しぇあるーむ 関係団体や個人からご寄付いただいた物品（食料品、日用品、衣料品）をストックし、利用者が自身の必要なものを選んで持ち帰ることが出来るよう専用の部屋を設ける。				

指標	**初期値/初期状態**	**目標値／目標状態**	**目標達成時期**	**アウトカム発現状況（実績）**
・支援人材の育成状況 ・支援者どうしの連携機会提供数	･情報共有をする機会：なし ・非常勤スタッフの関わり：平日午後のみ ･継続するための人材：約 2.5 人	･情報共有を行う機会：年 3 回以上	事業終了時点	詳細を以下の＜主な活動＞に記載。
＜主な活動＞				
・作業療法士によるコンサルテーション（再掲） 法人内の施設の職員が、子どもたちへの関り方について対応ケースを持ち寄り、作業療法士の視点から講師よりアドバイスいただく。法人内の施設間のスタッフ連携を高める機会としても位置付けている。 ・支援者支援研修（再掲）				

「モモにとっての支援者支援を考える」をテーマに、職員と理事を対象にワークを取り入れた研修を実施した。

＜合同研修＞（再掲）

■自立支援コーディネーター合同研修（岡山市主催）年 3 回

聖園子供の家、若松園、岡山市こども福祉課、岡山市こども総合相談所が参加し、各機関の情報共有を行う。

■障害福祉制度合同研修（岡山市主催）年 2 回

岡山市内の複数の障害福祉サービス事業者と共に、岡山市こども福祉課や岡山市こども総合相談所、児童養護施設や児童自立支援施設等が参加しての合同研修を実施。

■アフターケア勉強会の開催（第 1 回）「大分県の実践から学ぶアフターケア」

・日時：7 月 18 日(月)　13：00～16：30

・場所：岡山コンベンションセンター404 会議室

・講師：矢野茂生さん（NPO 法人おおいた子ども支援ネット理事長）

・参加者：13 名（子どもシェルター理事、職員）

■アフターケア勉強会の開催（第 2 回）「神奈川県の実践から学ぶアフターケア」

・日時：10 月 21 日(金)　13：00～16：30

・場所：きらめきプラザ 706 会議室

・講師：福本啓介さん（あすなろサポートステーション 所長）

・参加者：34 名（担当行政、児相、児童福祉施設など）

■アフターケア勉強会（第 3 回）「児童福祉法の改正と社会的養護自立支援事業について」

・日時：12 月 3 日(土)　13：00～16：30

・場所：きらめきプラザ 706 会議室

・講師：胡内敦司さん（厚生労働省子ども家庭局総務課課長補佐）

・参加者：33 名（担当行政、児相、児童福祉施設など）

＜他地域のアフターケア事業について比較検証＞

■現地見学：「退所児童等アフターケア事業所カモミール」（広島県福山市）

■Zoom 聞取り：「児童アフターケアセンターおおいた」（大分県大分市）、「あすなろサポートステーション」（神奈川県藤沢市）」

短期アウトカム②				
拠点が整備される				
指標	**初期値/初期状態**	**目標値／目標状態**	**目標達成時期**	**アウトカム発現状況（実績）**
拠点の確保状況	受け入れ可能な部屋数 居場所：3 部屋(1 人 1 部屋) 作業･訓練スペース：なし	受け入れ可能な部屋数 居場所：5 部屋 作業・訓練スペース：1 部屋以上 感染症拡大に防止に配慮した拠点の整備(空間の間仕切り等)	2022 年度中	受け入れ可能な部屋数 居場所：5 部屋 作業・訓練スペース：1 部屋以上 感染症拡大に防止に配慮した拠点の整備(空間の間仕切り等)

＜主な活動＞
・学習支援 高卒認定試験受験手続支援、通信制高校レポート作成支援、個々の学習経験に基づく支援

（2）アウトカム達成度についての評価

※複数のアウトカムの達成度を踏まえ、取りまとめ総合的に評価した内容を記載してください。

5－2. 波及効果（想定外、波及的・副次的効果）

・ロータリークラブとの連携を通じ、当初想定した以上に具体的な取り組みが前進した。
・定期的に会合を持てたことで、互いに意見を出し合いながら就労支援プログラムを作ることができた。
・支援拠点を持ったことで、関連機関と具体的に「ここでなにができるか」を話すことができた。
・アフターケアに特化した拠点ができたことで、事務所ではない場所で支援について考えることができるようになった。
・既存の支援事業から切り離し、アフターケアのことを集中して考えられる時間が持てるようになった。

5－3. 事業の効率性

・新規の拠点ができたことで、これまでの拠点と併用し、子どもどうしが顔を合わせない環境で個別に支援ができるようになった。いつ受け入れを行うか等の調整しやすくなり支援にいかせた。時間調整がしやすく、同時に複数人の支援ができるようにもなっている。
・個別対応のニーズへ応えられるような、ひとりひとりに集中した支援を行えるようになった。
・子どもたちにとって安全安心な環境をつくることができた。

6．成功要因・課題

事業で達成した成果のうち、特に社会課題解決に貢献したアウトカムと、達成が困難であったアウトカムについてその要因や課題を記載してください。

・特にできたこと／達成した要因

ネットワークづくり：本事業を通じ、例えば「就労支援であればこの機関へ」「学習支援であればこの団体へ」などのように、話を持って行く具体的な目的があったため、つながりを構築しやすかった。事業の目的達成に向けて足りないこと、必要なことを考え計画的に動けた。子どもに必要な支援を想定し、そこへの支援ができる団体とのつながりをつくっていった。

新しい拠点を使って、ワークショップや就労支援ができるなどができるようになった。具体的にそこの場所があるからこそ、新たな使い方を検討できた。

・できなかったなと思うこと／達成が困難だった課題

就労支援。当初は「就労の為のスキルアップ講座」実施等を計画していたが、アルバイトの経験がない、親が働く姿を見ずに育った等の背景がある子どもたちにとっては、「なぜ働くのか」「働くとはどういうことか」からイメージを持つ必要があった。就労を前面に押し出すのではなくまずは体験することであると考え、職場見学などの実施を行った。

7．その他深掘り検証項目（任意）

団体が重要・有益だと思うことを、より深掘りして検証を行った事項があれば、その内容を記載してください。
・事後評価を通じ、事例Ａ、Ｂの個人の支援事例を深堀できたことはよかった。「どのように支援を行うか」というケース検討は行ってきたが、その結果がどうであったかという個々の支援に対する検証はこれまでやってこなかったため、ひとつのやりかたを習得できた。

８．結論

ここでは、上記で特定した事実および価値判断結果より、事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度について自己評価し、事業実施の妥当性の評価として取りまとめます。
総合的に見たときに、課題やニーズの適切性、課題やニーズに対する事業設計の整合性、実施状況の適切性、成果の達成状況のすべてを振り返り、自己評価します。重要と思われる点や特筆すべき点を根拠として自由記載してください。また契約当初の総事業費から数百万円規模で増額・減額している場合や、アウトカム変更を行っている場合には、その変更の妥当性についても自己評価結果を記載してください。

８-１事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
（１）事業実施プロセス				○	
（２）事業成果の達成度				○	

（１）、（２）それぞれ１箇所を選択する。

８-２事業実施の妥当性
事業計画時に想定していた内容は実施でき、相応の成果は上げられた。

９．提言

ここでは、評価結果に基づき事業を継続していく上で、役立つ提案・助言を記載してください。本事業をどのように持続・発展させるか、休眠預金に依存せずに自走化させる戦略とその実施状況等を記載してください。
岡山市担当課との協議のもと、アフターケア事業の委託費の見直しも含め、今後のあり方について検討していく。
児童養護施設等の自立支援コーディネーターとの連携や会議の機会を設けながら進める。
公設の児童養護施設との連携も具体的に進められるよう、協議していきたい。

１０．知見・教訓

ここでは事業の経験や学びから類似課題への取組みに参考とできる具体的な教訓を記載してください。
・行政と民間などの各関係機関が、相互批判ではなく、互いの立場を理解しながら、協働できる方法を考え提案していく。
・これまでに培った当団体でネットワークにより、官と民が一同に会する場をつくり、提供できたことにより、様々な立場の垣根をこえて課題について話すことができた。

１１．資料（別添）

ここでは、以下のような事業の成果を伝える補強となる資料を別添でご提出ください。
・事前評価報告後に見直した事業計画やロジックモデル
・事後評価報告時の事業計画やロジックモデル
・事業の様子がわかる写真資料
　※公開可能な写真を貼付してください。（肖像権・著作権に十分にご注意ください）
・広報活動の成果品、報道された記事
・アンケート調査結果や実際に使用した調査票
・とりまとめられた白書
・論文、学会発表資料
・特許　など
※過去に提出したものは再提出していただく必要はございません。

★添付するもの

管理番号	名称	公開方法
報告書		
1	事業報告（パワーポイント）	
2	ロータリークラブ用事業説明（パワーポイント）	
会議録、議事録		
1	岡山県内自立援助ホーム連絡会　議事録	個人情報を含むため非公開